

## 論文の内容の要旨

論文題目 共観福音書の神義論—マルコによる福音書を中心に

氏名 本多峰子

組織神学で問われている神義論の問い、なぜ全能かつ善なる神が創造したこの世界に悪や苦難が存在するのか、との問いに福音書のイエスは答えていない。しかし、それは、イエスや福音書記者たちが悪や苦難の問題に無関心であったからではない。福音書に記されたイエスは苦しむ人々を憐れみ、癒し、罪人と言われている人々と交わり、自分の死を多くの人のための身代金であると言っている。

本論I章では、旧約聖書から中間時代における神義論的問いの展開と、マルコ福音書の時代的、思想的背景を論じた。聖書学的に見れば神義論の問いは、第一に、イスラエルの民に神が誓った祝福の問題であった。ヤハウェはイスラエルの民に土地の授与を確約し、永遠に彼らの神となると誓った。それなのに、なぜ彼らは土地を失い、不幸に見舞われるのか。この問題は、捕囚期にひとつの神義論を生んだ。それは、ヤハウェは全世界の歴史を司る創造神であり、バビロンを用いて彼らイスラエルの不信仰や不正を罰したのであると論じ、禍を神の罰と見て(禍の神義論)、応報の義の概念によって神の「義」を擁護するのみでなく、ヤハウェを単なる民族神から世界の創造主に高め、その絶対的支配と全能性を強調するものであった。その結果、新たな神義論的問いとして、創造主が全能であるならなぜ神の民が罪を犯すのか、との、人間の自由意志と神の全能の問題が出てくる。それに関して、イザヤ書などは、人間が罪を犯すのは神が人間の心を頑なにしたからであるが、神は憐れみによって究極的には民を救う、と考えることで、神の全能と義

を両方擁護した。神に造られた人間が悪を犯すということの説明としては、また、神が人間に善悪二つの霊や衝動を与え、人間は善の方に従うことを求められているという考えもあり、悪の存在をサタンやその配下の悪霊に帰す見方もヘブライ思想に入ってきた。一方、禍の神義論に対しては、義人の苦難の問題が意識され、その問題は BCE2 世紀のアンティオコス・エピファネスによるユダヤ教の迫害の時に深刻になり、答えとして、復活による贖いという思想が生まれた。

イエスの時代にも、イスラエルはローマの支配下にあり、亡国の問題は現実のものであった。また、病、障碍、貧困など、人々が神から見放されたように見える状態、あるいは、応報思想によれば罪の罰を受けているように見える多くの人々の状態も、神の祝福とは相容れないものであった。神はアブラハムに誓った民への祝福に忠実であるのか、問題となる。さらに、マルコ福音書が書かれたと考えられる 70 年前後は、エルサレム陥落によって、亡国の問題と神の祝福の問題がことに深刻になった時期である。また、キリスト者にとっては、ローマからもユダヤ人からも迫害された厳しい時代でもあった。信仰のために苦しむ彼らに神の義は示されるであろうか、これもわれわれの考察すべき問題であった。

Ⅱ章では、マルコによる福音書が、イエスを「神の子・キリスト」と宣言し、彼による神の国の到来の福音を告げたことの意味を考察した。マルコの描くイエスは、この「神の国」の実現が、当時の人々が期待していた政治的独立でも、当時の黙示文学に示されたこの世の終末的一掃と刷新でもなく、世の中でなされる癒しや悪霊祓い、貧しい人々への配慮など、人々の多様な苦難に応答する救済行為で成就していくことを示し、実践する。福音書の神は、人間の苦しみを自身の痛みとして感じるほどに人間を憐れみ、苦難の中にある人間を無条件で救おうとする。そして人々は、救いへの応答として(救われるための条件としてではなく)、神を愛し、隣人を愛する生き方への転向を期待されている。Ⅲ章では、ここで重要になる神の憐れみが、旧約聖書以来の人々が究極的に救いを信じる根拠となったものであることを考察し、マルコ福音書のイエスも、隣人への憐れみ(=同情)である愛を重視し、実践していることを見た。実践されたその行為の一つひとつは小さいが、やがては社会を変えいつの間にか大きな神の国に成長するであろう。

Ⅳ章では、人間の罪の問題について考察した。この問題に対しては、マルコによる福音書はまず、イエスが「罪人」をあるがままに招いたことによって神が彼らを見捨てていないことを見せる。この問題は、Ⅷ章でのイエスの受難についての問題にもつながる。

V章からVII章まででは、イエスの癒しと清めと悪霊払いの意味を具体例で考える。それらの行為によって、イエスは、苦しむ人々が、真っ先に神に顧みられ、救われることを示している。これは、苦難を神が与えた罪の罰と見る禍の神義論を否定し、苦しむ人々を肉体的疾患とそれに付随する社会からの疎外の両面から救うものである。ここで示される神の性質は、穢れや悪霊憑きを被っている人々を、神の救いから遠い忌むべき者たちとして忌避する見方が示唆する神とは反対である。そして、これらの癒しや清めや悪霊払いの一つ一つが神の国を実現してゆくと見られている。終末的なサタンとの戦いにおいても、小さな個々の悪霊祓いがサタンへの勝利の一步と見られ、この世のサタンの支配に対する神の究極的な勝利を確実にするものと考えられる。

VIII章では、イエスの受難の意味を考える。マルコはイエスの死を人々の罪のための贖いの死と示し、罪を犯さずにいられない人間の救いの問題を、自分の独り子を犠牲にして贖った神の救いによって解答している。マルコ福音書のイエスの受難と死は、それゆえ、民に対する神の義を表すものである。しかし、イエスの死は、それだけではすまない、イエスという義人の苦難の問題を呈する。この問題に、マルコ福音書は、イエスの復活による義の証で答えている。アンティオコス of the Great の迫害以降に発達した復活信仰によれば、この世で報われずに死んだ義人、特に、信仰のために死んだ義人は、神によって復活させられる。それは、義人に対する神の義と、復活させられる当人の義の両方の証である。そしてまた、イエスの義しさが立証されたことにより、イエスが神の国宣教において語った言葉や、行なった癒しや清めや悪霊払いの行為もすべて義であり、正当なものであったことが証明され、肯定される。しかも、イエスの死は「神の子」としての、すべての者の贖いの死として認識される。そのことによって、イエスがこの世で行なった救いの業やその他の言動の意味が、イエスの父である神の救済の計画の中で再認識されるのである。ただし、なぜ、神の子と提示されるイエスが十字架の死という極限的に苦しい死を被らねばならないのかについては、マルコ福音書は何も答えていない。この書ではただ、神的受動相の使用と3度の受難予告によって、イエスが引き渡されて殺されることが神の意図であると、示唆されるのみである。受難予告の際には復活の予言もなされるが、結局最後にはイエスは、神に「なぜ私を見捨てたのか」と問いつつ死んでゆく。イエスの死の理不尽さはマルコ福音書では、解決されないままなのである。そしてまた、イエスの死が神の意図とされる一方で、イエスを死に追いやる人間の罪も否定されてはおらず、人間の自由意志と神の意図の緊張も、マルコでは残されたままである。

イエスの最期の叫びは、限りなく絶望に近い状態をイエスが味わっていることを示すが、マルコでは、その絶望は、信頼と求め(問いかけ)を失っていない絶望であり、この絶叫と共に死んだイエスこそが、「この人は本当に神の子だった」との告白を受けている。そして、その絶望的な状態から神はイエスを起こす。このことは、同じく絶望的な状態にあったイエスの時代の人々やマルコの読者にも、救いの希望を与えたであろう。イエスの死と復活は絶望的な状況からこそ大きな救いをもたらされることを見せる。神はイエスを見捨ててはいなかった。同様に、神は、決して彼らイスラエルの民やマルコの読者を見捨てず、絶望的な状況においてこそ、彼らに救いをもたらすであろう。

マルコ福音書はまた、弟子たちがイエスを見捨てて逃げた罪に対して、復活のイエスが彼らを再び招くとの示唆を与え、この福音書が書かれた当時のキリスト教徒の中で、迫害に耐えられず棄教してしまった者たち、逃げてしまった者たちにも弟子たちと同様に赦しがあることを暗示しており、イエスを裏切った弟子やキリスト教徒たちの「罪の赦し」を重要な福音として示している。これは、共観福音書でも特にマルコ福音書に顕著な特徴である。彼は、弟子たちの無理解と裏切りとイエスによる彼らの贖いを、イザヤ書の頑迷預言と救済の約束に重ね合わせることで、イザヤ書の神義論のパターンに重ねあわせ、彼らの罪を、一方で彼らの責任において描きつつも、もう一方で神の意図によると考える緊張をあえて保持したまま、究極的な救いによって、神の信義を示す。このように、マルコは、旧約以来の神義論的問題であるイスラエルの民への神の祝福の約束の問題に、イスラエルの民すべてに対しても一そして、特に、弱者に対して一、イエス個人についても、また、マルコの読者に対しても、答え、神の信義を示している。そして、その際に強調されているのが、やはり旧約聖書以来重要であった神の憐れみである。また、共観福音書は旧約以来の、神の意思と人間の自由意志の緊張の問題などにも向かっており、マタイやルカではこのような緊張を和らげる動きもあるが、マルコ福音書は、あえてその問題の緊張を保持したままで、神の信義を示していることが一つの大きな特徴である。

最後に、われわれの論考のきっかけとなった組織神学の神義論のあり方を考えるならば、共観福音書の神義論が組織神学に示唆する回答は、「なぜ」悪があるか、ではなく、神が人々の悪や苦難に対して「何をなしているか」である、ということ、また、人間は神の救済的業を答えとして見るのみならず、神の国の実現に参加することを求められているということである。